2018・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

42号

2018・6-2018・12

◉特集◉ロングインタビュー

えちごトキメキ鉄道社長 嶋津忠裕さん

トキ鉄 開業3年を考える

―地域交通と雪月花と―

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

私のまち、直江津祇園祭

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中⑥

笏谷石に越後府中と直江津今町を見る

歴史は「今日」への手紙

古老の言葉を聞きなおす

私のまち、直江津祇園祭

冨塚　稔

私は生まれも育ちも直江津です。直江津と言えば、先日グランドオープンした「うみがたり」という人もいるかと思いますが、やはり私は【直江津祇園祭】だと思います。私は直江津祇園祭で大きくなったと言っても過言ではありません。直江津祇園祭は毎年七月二六日から二九日にかけ四日間行っています。昨年、県の民俗文化財に指定されています。

小学生のころは、七月に入れば友達との会話は自然とお祭りの話題でいっぱいでした。七月になると、笛太鼓の稽古が各町内で始まります。子供ながら笛、太鼓の音色を聞けば、熱い夏がやってきたと心がうずきだし、稽古に行くのが楽しみでした。学校から帰ってきて宿題そっちのけで晩御飯を食べ、近所の友達と集まり毎日稽古に明け暮れていました。上級生が稽古している姿を見て「かっこいいなぁー。早く本番でも太鼓を叩きたいなぁー」と思っていました。現在では子供の数が少ないため、お祭り本番で太鼓を叩くことは可能ですが、当時は子供の数が多く、叩くことができないことも多々ありました。

ここで少し直江津祇園祭について紹介したいと思います。直江津祇園は平安時代中期に始まったのではないかと言われています。当時は屋台（山車）のようなものはなかったようです。現在のように屋台が出るようになったのは一八〇四年頃からと言われています。現在では一九町内に屋台があり、各町内で特徴ある屋台になっています。お祭りに参加する私たちにとって自分たち町内の屋台は誇りであり、魂でもあります。一年のうち、四日間だけ姿を現す屋台ですが、私たちにとってこの四日間が一年で最も大切な期間だと言っても過言ではありません。

直江津祇園祭の見どころとしては、四日間全て見てもらいたいのですが、なかなか全て見られないという方もいるかと思いますので、かいつまんで日程を紹介します。

まずは初日七月二六日の夜です。個人的には一番好きな日です。花火が打ち上げられる中、高田へ出向いていた神輿が船で直江津へ帰ってきます。これだけでもすごいと思っていますが、さらに一九町内の若衆が御神輿の帰りを待ち、御座舟からあげられた神輿を威勢よく担いで御旅所へ

向かう姿が圧巻です。
二七日からは直江津各所を一九町内の屋台が巡行します。二八日の夜は直江津中心街で大民謡流しがあります。一方、直江津を巡った神輿が八坂神社に還御されます。この神輿を担ぐ姿にも迫力があります。
最終日二九日は、何と言っても御饌米奉納です。一九町内の屋台が直江津駅前通りに集まり、八坂神社へ御饌米奉納が行われます。若衆が米俵を担ぎ、参道を勢いよく駆け抜けます。各町内様々なパフォーマンスも見どころです。
また、一九町内で笛・太鼓の音色が若干違います。こんなところにも注目してもらえれば、もっと直江津祇園祭を楽しめるのではないでしょうか。
御饌米奉納が無事終了し、町内に帰ってきたときには、ほっとする反面「今年の夏も終わったな」とすごく無気力になり寂しい気持ちになります。

今、直江津は少子高齢化が深刻な状況です。今後、祭りの運営すら危うい状況が出てくるかもしれませんが、先輩方が守ってきた素晴らしい直江津祇園祭をこれからは自分たちが引継ぎ、後世へ残していかなければならいと思っています。
子供からお年寄りまで盛り上がることができる祭り。離れた土地で暮らしていても、この時期だけは帰ってきたくなるまち直江津、そして直江津祇園祭です。
今年も間もなく熱い四日間が始まります。直江津全体がひとつになるこの四日間、是非ご期待ください。



とみづかみのるさん
上越市中央一丁目（屋台を出す町名で言えば「旭区」）　生まれ　三七歳
平成二六年えちごトキめき鉄道株式会社入社
設備センター施設課土木係長

ロングインタビュー・平成30年5月9日　インタビュアー　北越出版／上越信用金庫　日馬直一

■えちごトキめき鉄道社長　嶋津忠裕さん

トキ鉄 開業3年を考える

――地域交通と雪月花と――

―「直江の津」のでインタビューさせていただいたのは、開業のちょうど一年前でした。

嶋津　もう一度、読むと結構、しゃべっていますね（笑）。

―市の伝統的建造物整備支援事業の調査で、二本木駅へお伺いしました。こういう場所で説明する時は、業者が来て設計図を見せたり、歴史的価値を説明するのですが、横田さんという担当の方は、全くメモなしで全部説明されて、びっくりしました。こういう方がいるんだなと…。

島津　彼は早稲田の地理学科なんです。地理も歴史も勉強してます。

―あそこまで頭にたたきこんで…。

嶋津　面白い人が、トキ鉄を受けてくれた。



左／妙高はねうまラインを走るET127系車両　妙高山をイメージしたデザイン
中／日本海ひすいラインを走るET122系車両　日本海の波をイメージしたデザイン
右／豪華なデザインと隅々までALL MADE IN NIIGATAを選び抜いた車両が評価され、グッドデザイン賞や鉄道友の会からローレル賞を受けた「雪月花」

―もう一人、面白い方がいらっしゃしましたね。

島津　結構、うちの会社、若い人で面白い人がいるんですよ。将来が楽しみです。

―二本木の駅舎は、私が説明するまでもなく明治の建物が残っているのは二本木駅だけです。当時の漆喰と下見板が残っていますから、そこまで残せるといいですね。

嶋津　完全復元できると一番いいのでけれど…。

―ホームから見下ろす角度もいいし、レンガの油倉庫もあります。駅舎の建築に使った「和釘」をよく発見して残してくださって、建築の専門家もびっくりしていました。

嶋津　市も大変協力してくださって、なんとか復元の方向で…。でも一度にお金は出ないので段階的にやっていきます。

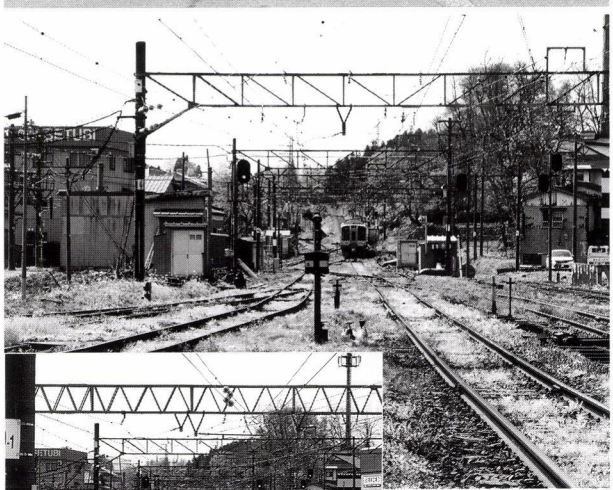
―有間川の駅もいいですよね。駅舎は民間の運動で建てたものですね。

嶋津　雰囲気がとてもいいですね。海をバックにしてね。

―二本木駅に戻りますが、ホームの端にあるスイッチバックがよくわかる見学スペースは抜群ですね。いい大人が「すごい！」すごいって声をあげる。それに意外に電車の本数があるんですね。どこか、少ないんだろうという先入観がありますね。

嶋津　増やしたんです。元々、トキ鉄だけの運行、―はねうま、ひすいラインを増やす予定でいたわけです。そうしたら、特急しらゆきが五往復、北越急行（ほくほく線）が入ってきましたでしょ、大混雑です。単線ですから、なかなか他のスジが引けない。土・日曜には越乃Shu＊Kuraと雪月花も走っています。そのスジを入れるのがやっとです。





上／二本木駅舎・中／急な坂を上る列車
下／スイッチバックの観覧席



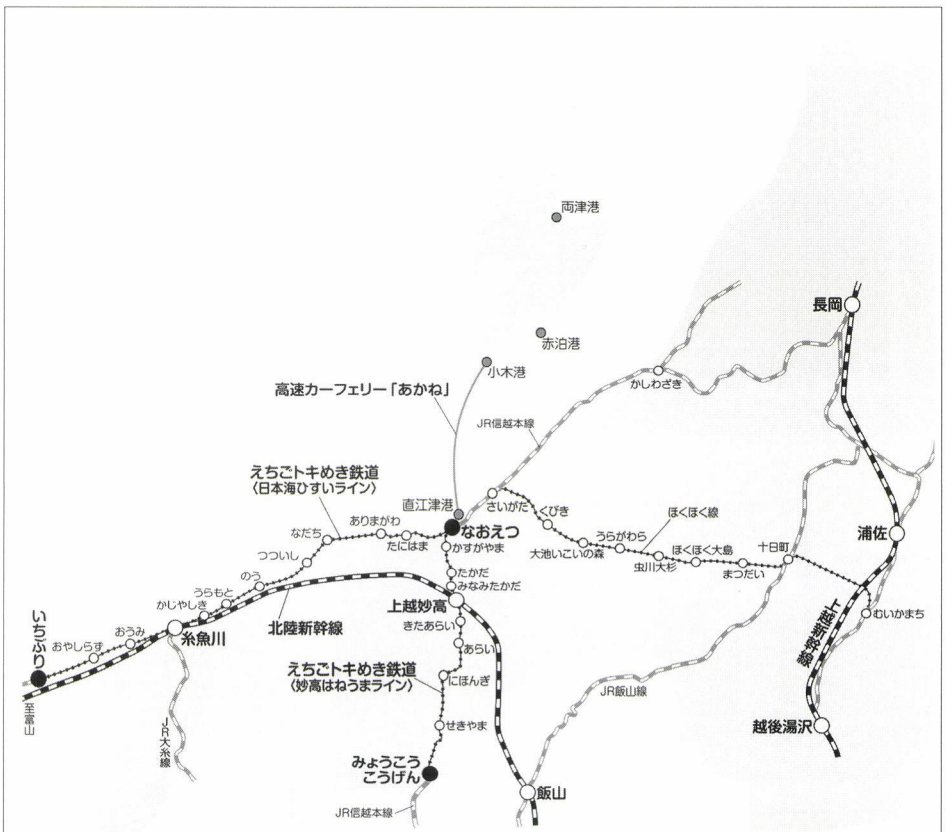
日本海を背にする
有間川駅

■開業三年間の感触は

―開業三年で、大まかな感想として「上手くいっているな」という感触は、いかがですか？

嶋津　上手くいっているかどうかという評価は我々がするものではないので、地元の方が評価してくださるのだと思いますが、一応、目標としてきたことは、かなり具現化していっていると思っています。

例えば、先ほど本数の話が出ましたけれど、開業にあたっては運行本数を増やす、利便性を高める、運賃はＪＲ時代と同じ水準に据え置くとか、乗り継ぎ割引とか、もちろんダイヤ改正、これも色々ありましたが、先ほどのように六本の線路と接続しているわけです。北越急行、ＪＲ信越線、しなの鉄道、あいの風とやま鉄道、大糸線、新幹線。五本の鉄道と一時間に一本の新幹線と接続を良くするというのは、本当のことを言うと至難の業なんです。ですから開業当初は、どちらかというと在来線



平成 22 年　並行在来線株式会社
平成 24 年　越後トキメキ鉄道株式会社
資　本　金　66 億 7,710 万円
全　　長　97㎞　11 駅
　妙高はねうまライン　直江津・妙高高原　37.7㎞
　　しなの鉄道北しなの線に接続
　日本海ひすいライン　直江津・市振　59.3㎞
　ディーゼル車両　あいの風とやま鉄道に接続
　　糸魚川で JR 大糸線に接続
平成 28 年　えちごトキメキリゾート雪月花運転開始

の接続重視型。次に新幹線との接続の利便性を高めていく。だんだん、新幹線中心型になりつつあります。時間はかかりますけど、徐々に六社との接続は良くなってきていると思います。ひすいラインはプラス九本、はねうまラインはＪＲ時代一〇本だったんですが、プラス一六本。ここは大幅に増えました。

利用人員は、開業年の二〇一六年度は残念ながら定期以外は減りましたが、通勤通学定期が増えてトータル利用増となりました。これは生活路線として地域の皆様にある程度、評価していただいた証しだと思います。

少子化といわれながらも、二〇一七年度も通勤通学定期は、どの駅も軒並み増えています。直江津もそうです。しかし定期以外は落ち込みました。色々と原因は考えられますが、定期以外が落ちると売り上げ的には大きい。やはり鉄道というのは利用していただいてなんぼの事業ですからね。



平成27年4月14日　えちごトキメキ鉄道開業
直江津駅でテープカット。

―直江津駅に近い駐車場が利用増になっているそうです。渋滞でイライラするより、パークアンドライドで鉄道を利用して通勤する人たちが増えているのかもしれません。

嶋津　駅の利用で一番、増えているのは上越妙高駅と妙高高原駅です。妙高高原駅はどちらかというと、しなの道鉄のお客さんです。オーストラリアなどインバウンドのお客さんがスキーに来る。この二つが双璧ですね。

いずれにしてもある程度、当初の目標は達成できているのではないかなと思っています。地域の方の利便性には十分、応えていっていると思ってはいます。

■社員の構成は

―前回のインタビューで、東西ＪＲの社員が入ってきているので、その混成チームを一〇年で生え抜きの社員に代えるとおっしゃっていたのですが。

嶋津　そうですね、今や生え抜きの若い社員が半数以上になっています。開業して三年で半数ですからね。これから毎年、採用して育成していけば一〇年後には一〇〇％は無理としても九割がプロパー社員になると思います。

―社長室へ来る間も社員のみなさん、ニコニコして挨拶してくださるので、すごく気持ちよいですね。いい人ばかりなんだなと…。

嶋津　若い人にはとにかく笑顔で挨拶しなさいというこ

とをひたすら言っていますので、彼ら、張り切って励行してくれていますから。


熱心に思いを語る嶋津社長

■想定外の豪雪で

―今年は昭和五三年の豪雪に匹敵するような雪で、特に直江津側が…。想定外のことでご苦労されたと思います。

嶋津　想定外でしたね。海線はあまり降らないという想定でしたからね。海線の車両が雪を抱えて止まってしまいました。短時間でわっと降ったのもありましたね。

―ＪＲあり、ほくほく線ありで、それを調整しながら除雪されるわけですから大変だったと思います。除雪車両も沢山お持ちですね。

嶋津　どちらかというと山線主体で持っていたので、海沿いは想定外でした。

　昔からの慣習で、海線はＪＲ西と付き合いの深かったところで除雪、こっちはＪＲ東と、それぞれ守備範囲が決まっていたわけですが、今年初めて、そんなことは取っ払えとなって、うちは海だろうが山だろうが総動員でやるのだと…。いい反省になりました。

―昭和五三年もその前の昭和三八年もほとんど保線の人たち総出で、手作業で貨物車に雪を積み込んでという時代でした。逆に機械力だけでやるというのは、大変なことですね。

嶋津　結局、投排雪車はスピードがあまり出ないので、それが走っていると他の列車は通れない。ですから通常は深夜に走らせるのですが、今回のような時は、一旦止めて、とにかく投排雪車を日中に出して除雪をする。朝夕は通勤通学の方がいますから、朝夕はできるかぎり運行を確保する。そういう順番でやったのですが、その通りいった日もあれば、行かない日もありました。

―今までだと、朝になって外を見たら大変だという雪だったのですが。

嶋津　日中に降りましたからね。これからは、昔はこうだったというのは通用しないということですね。何が起こるか分からないので、色々なことに硬直化しないで対応しないといけないと思いますね。

■やはり「雪月花」

―じつは、三年経って地域の足はどうだったのかという検証を中心にお聞きしようと思っていました。

　鉄道とは、とやまライトレールのような利便性、えちぜん鉄道のような、乗降に不便な老朽化した駅と観光とをアテンダンドさんがうまく繋いでくれる。そのような地域の足として捉えているのですが、タイムリーなことに『リゾート列車の育て方』が出版されて、読んでみると、今回のインタビューは、どうもそこではない。ということで「雪月花」についてお聞きすることにしました。

地域の足を守る



地域の足を守るトキ鉄　日本海ひすいライン　直江津駅



上／富山ライトレールは間もなく市内電車と結ばれる
下／えち鉄（えちぜん鉄道）は土・日・祝日に自転車乗り入れができる

前回のインタビューを読みかえすと、社長さんは、すでに「リゾート列車だ」という構想をお持ちでしたね。

ＪＲから出向している社員さんは、「観光方面」の方ではないから、開業当初からリゾート列車という構想は、ちょっと無かったのではないかなと思います。しかし、地域の足を安定させるためには、観光を充実させていかなくてはいけないという思いが強くあったのかなと…。

嶋津　沿線の方の生活利用の路線だけでいくと、これはどんなに便利にしても結局、沿線人口は減っていくわけですから右肩下がりにならざるを得ないわけです。利用者を増やす、維持するためには沿線外からおいでになる観光客を増やさないといけないわけです。

ひとくちで観光客を増やすといっても、正直なところ、この地域は観光客が来て楽しめる要素が少ない路線ですから、目玉列車を持って、その魅力でお客様を呼び込むことが必要なわけです。それには相当に目立つというか、あるいは皆さんに感動を与えられるような列車でないと満足させられません。

ちょうどそんな時、泉田（元知事）さんから「どうせ造るなら観光列車」という提案があって、

私「同感ですが、特徴のない列車だと、ここでは持ちませんよ」

泉田「どういうリゾート列車だったらいいの？」

私「造るなら新造車で。ただし高いですよ（笑）」

泉田「いいですよ」

ということで、あのような列車を造ることになったわけです。

しかしハード（列車）がすばらしくても、最終的には沿線の方々と一緒になっておもてなしをする列車でないと飽きられて長続きしないと思っておりましたので、最初から自分でソフトのイメージを作っていました。どうやって地域の人を巻き込むかということです。開業前か

らいろいろな所へでかけて行って、色々な人と接しながら、意欲のある方々とまずスタートしようと。その結果が、二本木であり能生であり高田ということになったわけです。もちろんこの三か所だけでなく、この例を見て、自分の地域もやろうかなというところが出てくるはずなので、一緒になって取り組んでいけば沿線の観光の深みになるというか、奥行きを出すことで、リピーターが生まれると思っています。

表面的な通り一遍の観光ですと、リピーターが生まれません。そういう意味では、雪月花は非常にリピーターが多いですね。運行して二年間で一五回も乗ったという方がいらっしゃいました。これはほぼ二カ月に一回は乗っていただいているということです。そういうファン作りが必要ですね。そのためには雪月花は、ハードだけではなく地域の方の〈おもてなし〉や料理があります。また、お客さまと一番接する乗員にアテンダンドがいますが、特色のある個性豊かな乗員による沿線ガイドで、沿線をもっと色々な方に知っていただく。そしてお客さまには、沿線地域をもっと知りたいと思っていただきたい。それらを発信していけば、リピーターが増えて来るのではないかと思います。

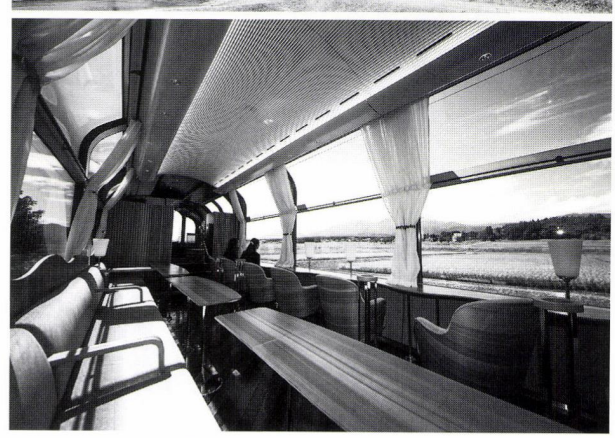
くり返しになりますが、雪月花には専属車掌がいますが、それぞれ鉄道や沿線の歴史などを自主的に勉強していて、車内アナウンスや停車駅での駅舎のご案内をしています。「案内が面白い」、「とてもよく勉強していて感心した」という、ありがたい声をいただいています。

―Jホールディングス前社長の伊藤さんもおっしゃっていました。「ちょっと勉強して、おりこうになって帰るのがこれからの観光」だと。

嶋津　そうですね。そういう方はもう少し深く知りたいと思う。そうするとリピートになりますね。







上／広がる日本海を眺めながら走る雪月花
中／秀峰妙高山麓を走る雪月花
下 / 広い展望と豪華な車内

―そして、滞在してみたいということになる…。

『リゾート列車の育て方　えちごトキめきリゾート雪月花　誕生秘話』は大変面白い。著者の黒崎直史さんは非常にマネージメント能力の高い方だなと思いました。黒崎さんに白羽の矢を立てたのは？

嶋津　県から二年の出向で。しかし県に復帰するころになっても、雪月花にはまだやらなくてはいけない課題が沢山ありました。あと一年残ってくれないかと頼んだら、笑いながら「いやぁー、出世が遅れます」という返事でした。すかさず「長い人生、一年ぐらい出世が遅れたって。それよりもここできちっと達成感のある仕事をする方が、いずれ倍になって帰ってくるよ」と、残ってもらったんです。本当に一生懸命やってくれました。

―この本で雪月花というものの組み立て方が、大変よく分かりました。読んでいくと、ネーミングについても相当な議論があったようですが、三年前にインタビューをした時点で社長さんの中では、「雪月花」という名前は、すでに決まっていた？

嶋津　雪月花という意味、知らなかったんです。高田開府四〇〇年のポスターを何気なく見たら「雪月花」というコピーがありました。「雪月花」ってなんだ？　と思って辞書を見たら四季を表わす言葉だと。ここは雪のある四季、それが特徴なんだ。それをぜひセールスポイントにしたいと思っていたので、列車の名前も「雪月花」がいいなあと思っていました（笑）。



リゾート列車の育て方
―えちごトキメキリゾート雪月花誕生秘話―　黒崎直史著

―車両をデザインされた川西康之さんとは肥薩おれんじ鉄道時代に。

嶋津　はい。一生懸命がんばってくれました。ものすごく情熱のある人ですからね。列車の設計はやったことがないのは知っていましたが、その分、既成概念が無い。あれだけ情熱があって、鉄道が好きな人だから、家を建てるのと列車を造るのも同じかと（笑）。彼も大分苦労しました。着手してから設計まで非常に時間があったんですが、結局、開業までには間に合わなくて一年後になりました。結果的にはそれが良かったですね。開業でバタバタしているところに雪月花をやるのはとんでもなかったかなと思います。

―超豪華列車と言われる四季島などにはない、コンパクトだけれどギッシリと魅力的なアイデアが詰まっていますね。車体のほとんどが窓のような印象ですが。

嶋津　あれは泉田さんの案ですね。できるかぎり天井まで窓にしたらって。妙高山や日本海を眺める時にあの大きさはいいですね。それに九九・九％紫外線カットというのも女性には評判がいいです。やはり既存の列車を改造したものと、新しく作ったものと相当差があるなと思いました。既存の中古のものですと、外構は変えられないので、内装や外装を変えて行くだけですから限界はあ

りますね。

―食事のコーディネートを「自遊人」の岩佐十良さんに依頼したのは、得難い人材を見つけたと思います。あのプロデュース感覚というのは、会社を魚沼へ移転させてしまうぐらいの方ですからね。「自遊人」という雑誌はどこにもないスタイルの雑誌ですね。非常に面白いなと、「サライ」や「dancyu」みたいでもあり、そうでもない不思議な感覚がありますね。

嶋津　食に信念を持っていて、里山十帖という宿を大沢山温泉でやっておられますが、料理のメインがお米なんです。それが変わっていますね。あのようなのは面白いですね。

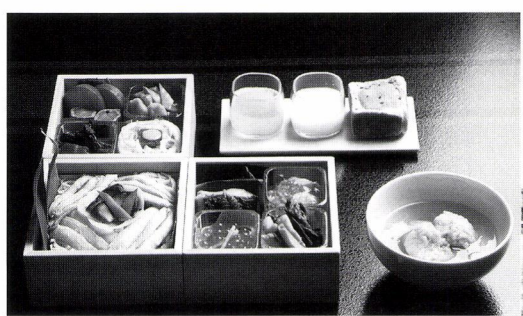
―十日町出身で、六本木の「リューズ」というフレンチレストランのオーナーシェフ飯塚隆太さんにレシピの監修を頼んだのは岩佐さんですね。

嶋津　個人的には知らなかったのですが、非常に良い方にお願いできたなと思っています。

　いまや世界的な香辛調味料の「かんずり」を使用したサンドウィッチや短角牛のコールドビーフは大変好評をいただいています。

―糸魚川の鶴来家さんに目を付けたのは、社長さんだとか…。

嶋津　鶴来家さんのご主人が、火事で焼けたけれど、とにかく雪月花のお弁当だけはやらせていただきたいと言ってくださってね。その心意気が料理に反映されているんだなと思います。非常に熱心で、四季折々で工夫してくださっています。



上は糸魚川発午後便の和食



右は上越妙高発午前便のフレンチ三段重

　紅ズワイガニをぜいたくに使っているちらし寿司、下に敷いている錦糸卵には、地元海洋高校の生徒さんが開発して評判になった「最後の一滴」を隠し味に使っています。それに郷土料理の「こくしょ（のっぺ）」や「えご練り」も出て喜んでいただいています。

―三段重というのは、列車への積み込みも考慮されているのでしょうが、フレンチまで三段重にしてしまって。いわゆる駅弁ではないコンセプトで、ふたを開けたときにわくわく感があって評判が良いようですが…。

嶋津　両便とも地元の旬の食材を吟味して使っていますし、お皿で出されるようなお料理を三段重にぎっしりと彩り豊かに入れたことで、目でも舌でも楽しんでいただ

けて、手前みそになりますが、ほんとに評判がいいです。

―三時間ぐらい乗って食事して、何か魅力があるのかなと思いますが、このぐらいの時間で食事をして外を眺めて次の目的地へ。これは完全に新幹線のお客さんを降ろして、雪月花に乗せるということだと思うのですが、あわよくば滞在させたい…。

嶋津　雪月花の客層で一番多いのは六〇歳代、次いで七〇歳代、五〇歳代です。相当シニアが多いですね。これからはシニアの客層に合った提案がいいのではないかなと思っています。ですから忙しい旅はダメですね。

―団塊の世代は一番お金が潤沢で、うまいものも食べたし、海外も行ったから忙しく旅行をしたくないという世代ですからね。お値段も遠くから来て乗るのにはちょうどいい額ですね。

嶋津　あまりにも良く出来すぎていて、新幹線でみえて、また新幹線に乗ってどっかに行ってしまう。今後は滞在できる仕組みが必要ですね。

―糸魚川で新幹線に乗って金沢に行ってしまいますよね。

嶋津　逆ルートも増えています。名古屋方面からのお客さまが増えています。名古屋から白川郷や飛騨などの見どころを回って金沢か富山に泊まって、新幹線で糸魚川へ来て雪月花に乗る。最近すごく増えました。どちらかというと糸魚川発のお客さんが多い状況です。インバウンドもそのルートが多いですね。

―新幹線が開業する前のことですが、金沢の人に、開業したら上越に遊びに来ませんかと言ったのですが、新幹線のルートを知らなかった。金沢の人にとっては、新幹線は金沢へ来るものであって、金沢から新幹線でどこへ行くかは、あまり興味がないらしい…。

嶋津　延線するとまた変わってきますよね。関西が本当に近くなります。

■これからの展開と相互乗り入れなど

―相互乗り入れについてはどうですか？

嶋津　今回はしなの鉄道（篠ノ井・長野間はＪＲ）の「ろくもん」と雪月花が、上田城の桜、高田城の桜を訪ねる相互乗り入れが実現しました。大変魅力的な企画で、今後も続けていきたいと思います。姉妹都市でもありますし。

―前回は書かないで欲しいとおっしゃしましたが、大糸線からぐるーっと回って、篠ノ井線で下ってきたら面白いなと思いますね。姥捨駅からの絶景を大きな窓から眺めたらどうでしょう…。これはディーゼルだからこそ考えられることだと思うのですが。

嶋津　そうですねぇ。いろいろ夢が広がりますから、研究する必要がありますね。まだ正式発表はできませんが、秋の大地の芸術祭に北越急行線に乗り入れて松代や十日町で降りてもらって、大地の芸術祭を味わっていただいて、湯沢から帰っていただくという案を考えています。時間がかかりそうですので、片道運行になると思います。

北陸新幹線できて、里山をめぐって上越新幹線で帰る。周遊ルートですね。そういうものの開発にもつながるとおもいますよ。新潟県はいい位置に新幹線が二本あるの

で、それを活用した周遊ルートを提案していこうと思います。

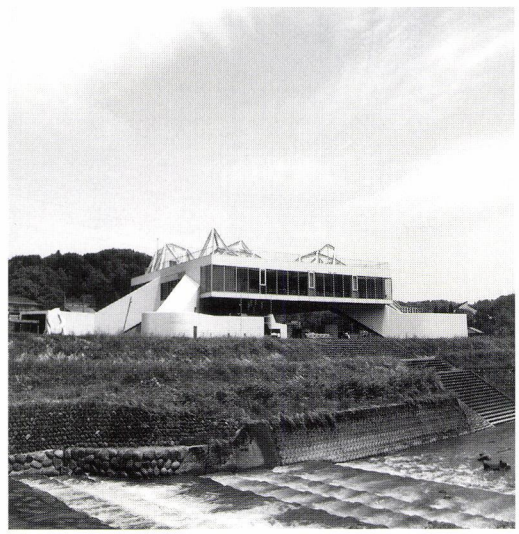
―ほくほく線で行くと犀潟から平野が広がって、田園と妙高の山並みの景色は素晴らしいですね。

嶋津　ほんとにいいロケーションです。

―かくまきでお出迎えする企画の反響は？

嶋津　すごくいいですね。冬季運行は定着すると思っています。冬場はどうしても雪がテーマになると思います。本当は妙高高原まで雪月花を上げたかったのですが、非常にリスクがあると、みんなから「それは社長ダメです！」って止められた（笑）。やってみて、ダメだったらあきらめたらいいじゃないか？　と言ったのですが…。今は二本木まで行っています。

　ちょっと雪の山とか雪原を見ていただいて、高田の雪国の暮らしを体感していただく。高田は古いものが沢山残っていますし、世界館もあります。



大地の芸術祭　農舞台

■えちごトキめき鉄道
　嶋津さんのプロフィール

しまづただひろ
1945年　熊本県人吉市生まれ
東京都立戸山高等学校・慶應義塾大学経済学部卒業
1971年　藤田観光（株）入社
箱根小涌園事業所・東京椿山荘事業所・本社経営企画部・事業部企画室長・本社人事部ニューキャリア支援センター長・執行役員椿山荘事業所総支配人を歴任
2003年　肥薩おれんじ鉄道㈱代表取締役社長
2010年　新潟県並行在来線株式会社（現えちごトキめき鉄道株式会社）代表取締役

　ただ列車で通過していただくのではなくて、しかるべきところでお客さんに降りていただいて、まち巡りをするというのが非常に評判いいんですね。まち巡りツアーが、またあったら、ぜひ知らせして欲しいというご要望が多いです。

■トキ鉄のおひざもと直江津は

―さて「直江の津」としては、直江津は出遅れているなという感じがしますが。

　直江津郵便局の近くに、明治四年築の土蔵がある元呉服屋がありまして（主屋は明治四〇年）、地域おこしを目的に買い取った方がいらっしゃいます。大幅に改修しなければいけませんが、土蔵と母屋とが一体になっている座敷蔵の町家で、市内ではとびきりの文化財級の町家だと思います。

　実験的にランチバイキングをやったりしたのですが、今後、食事なども提供して、まち歩きの拠点にしていき

たいと所有者はおっしゃっています。いろいろな文学碑も近くにありますし、直江津に来る観光客は、二、三人であまり観光的でない町をめぐって歩く方が多いので、良い拠点になると思います。

嶋津　三年前にもお話ししましたが、直江津の素晴らしさとか、そういうのも存じあげているし、まだ雪月花がらみでは実現していない部分がありますので、忸怩たる思いではいます。

　利用客の目線で、そういうものに十分耐えられるか、楽しんでいただけるか、ということを考えながら、直江津をめぐることができるようになればいいなと思います。とにかく、そういうことを全然あきらめたわけではないので、なんといっても直江津はトキ鉄の本拠地でもあります。ここは鉄道の町でもあり、港町でもあり、非常に歴史のある町でもあるので、雁木通も残っていますしね、そういう町並みなどをアピールできる時が来るのではないかと思っています。

　そういう日がくるのを楽しみに、まだまだ色々なものに時間がかかると思います。そういうきっかけが、新水族館で出来るといいなあと思いますし、まちおこしに拍車をかけるお手伝いができたらいいなと思います。

■駅から歩いて水族館へ

―直江津は、歴史的に水族館があるのが当たり前のようなまちですから、直江津地区の人たちがどのように盛り上がっていくかがカギだと思いますが。

　水族館へ魚の勉強に行くと思うと「一生に一回しか行かない」という笑い話があります。鶴岡市のクラゲの水族館がよく話題になりますが。ツアーなどで「そんなん見るかや」と言っていたのに、帰ってきたらその話題ばかり。八景島さんが入った直後ですが、電車の中で「市



活用が期待される旧呉服店



三八朝市の賑わい



文学碑めぐりでガイドの説明を聞く

立にしてはすごく面白い水族館だなあ」という話を聞きました。その辺りをもっとアピールできれば…。

嶋津　水族館長さんがおっしゃっていましたが、新潟市の「水族館は学習の水族館」「直江津の水族館はエンターテインメントの水族館」という住み分けをきっちしりながら、今まで以上にお客さんを呼び込んでいきたいとおっしゃっていました。そういうところを追及していただければ、非常に個性のある水族館になりますよね。

―「水族館へは直江津駅から」という期待もあります…。

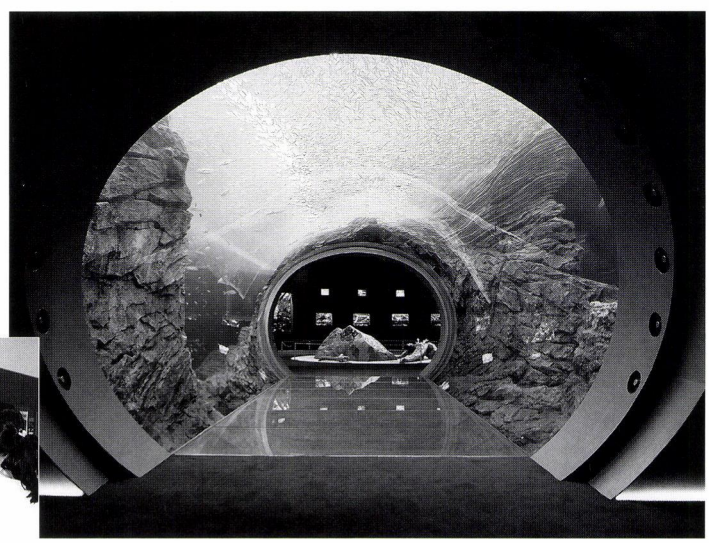
嶋津　新幹線だけのお客さまだけでもないし、また、マイカーだけのお客さまだけでもないと思いますね。ですからどの程度、直江津駅から行かれるかは、実際に開業してからでしょうね。回遊ルートが賑やかになって行くのは、一挙には難しいと思いますが、これは地域の盛り上がり次第という一面もあると思います。それを目標にしながら、まずはオープンの時ぐらいは、なにか駅前からご案内できるようにしたいと思います。

―水族館長さんのお話だと、埼玉県だとマイカーかもしれないけれど、首都圏に入るとほとんど新幹線でいらっしゃる。その後にはインバウンドのお客さんが必ずついてくる。やはりまちの人は「新幹線で来てトキ鉄で」ということを考えないといけない。とも話されていました。

嶋津　北越急行（ほくほく線）もあるわけですから、直江津駅からなにかご案内できれば、そういう体制をつくっておかないと。

―水族館をＰＲするペナントも水族館までの道案内として、もっとあればいいのですが。なかなかそこが…。

嶋津　地元の色々な思い願いは大切にしなくてはいけないのですが、オープンですから、まずは最短距離で駅から歩いてもらう。そういう風にしないと、最終的に選択するのはお客様ですから、遠くまで回されて非常に遠かったとなると「いやー、あれは使えないな」ということになるわけです。まずはお客様の側に立って考えない



上越市立水族博物館「うみがたり」
３万匹の鰯が回遊する大回遊水槽



「うみがたり」オープンイベントで
トキ鉄グッズ販売

と。自分たちの都合で考えちゃうと、本末転倒になって、かえって悪い結果をもたらすことになるかもしれません。

―イトーヨーカドー・エルマールさんの土産物売り場が思いのほか充実していて、帰省帰りで土産を買う人が多いですね。水族館の帰りに土産を買っていただくということも、歩いていればできるのではないかなと思います。

嶋津　まちなかの色々なお店が元気づいてくるのを最終的には目標にするわけですが、それには時間がかかりますね。一応、最初はこういう形でというところでスタートして、駅から歩くということを利用者サイドに立って作らないと…。ずっとサービスにいましたから分かりますけれど、お客さまは、とっても勝手なんですよね。こちら側が思っているところと、お客さまの思っているところとは違っていることがあります。意外なところで喜んだり、意外なところで不満を持つわけですね。不満を持たれてしまうと、だいたい満足の一〇倍ぐらいのスピードで返ってきますからね。それは恐ろしいですね。

―特に今はSNSで発信して拡散したら一発ですからね。

嶋津　「鉄道で行くものかっ」となると、マイカーかバスに限定されますからね。

もちろん回遊というのも将来的には目指すべきだと思いますが、まずは利用者サイドに立って利便性をお客さまにアピールすることですね。早く目的地へ行きたいという期待感は誰も同じでしょうから、たとえば往路はバスで直行していただく。帰りはまちなかをゆっくり回遊していただく、お客様によってはその逆もありますね。

その間に、回遊の仕方もいろいろ生まれて来るでしょうし、帰りはあそこに寄ってみたいなとなって、歩いてみるかと。そして、お買い物をしていただく。そういうふうになっていくのが大切だと思いますね。

―直江津の駅を降りて、しばらく砂丘のまちへ上っていくと潮の匂いがして来ます。せっかく海のあるまちに来たのですから、歩いて潮の匂いを感じていただいていただきたいと思います。

嶋津　そうですね。都会の人は二〇分、三〇分歩くことは苦にしませんから、歩く場所に少しウエルカムな雰囲気があるとね。

―なんでこんなところを歩かされるのかと…。

嶋津　観光に来たのにね。だから、その辺ですね…。

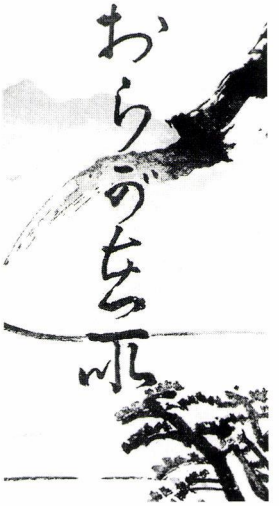
インタビューを終えて

時間が足りないほどの熱気あふれるお答えをいただいた。開業前からのフィールドワークで地域事情に精通され、今年の豪雪への対処や雪月花のサービスに生かされていると実感した。嶋津社長には、三年たって充分な手ごたえを感じているのではと思った。

前回のインタビューの少し控えめなお答えに、インタビュアーの力不足を棚に上げて言えば「物足りなさ」を感じたが、肥薩おれんじ鉄道での実績をどう生かしていくか、単純ではない五つの鉄道と新幹線をどのように連携させていくか、仕上げの時期に来ていて、答えにくいところもあってのことだったのかと思い返している。

◆4・10・12頁の写真提供・えちごトキメキ鉄道





「五智保勝会座談会」
その２
昭和５年８月19日
五智和倉楼の記念館

『おらが在所』は、昭和五年に「東京日々新聞」（毎日新聞）高田通信所が、一市三郡の名士の各座談会を開催して「新潟版」に連載、それを上越座談会集刊行会が一冊にまとめたものである。題字は史跡探訪のために訪れていた徳富蘇峰の手になる。八〇年も前の座談会は、今も変わらぬ問題を提示し、示唆に富んだ内容である。

旧漢字旧かなは現代文に改め、また基本的人権にかかわる発言もあるが時代背景を考慮してそのままとした。

■出席者

前列右から

堀前惠三　光源寺住職
金子昭道　国分寺別当
斎藤秀平　上越考古学研究会副会長・高田師範教諭
川合直次　五智保勝会顧問・高田市長
荊木一久　五智保勝会理事・弁護士
田中光武　東京日日新聞高田通信所記者
渡邊義房　東京日日新聞高田通信所主任

中列右から

山本太郎吉　善光寺大本願別院十念寺世話人
岩片吉五郎　五智保勝会理事・和倉楼主
渡邊喜一　国分青年団代表
久保田喜一　国分小学校長
花前輝千代　県社居多神社社掌

後列右から

山口榮次郎　五智保勝会常任理事
瀧川美堂　五智保勝会理事・彫刻師
岡本喜助　善光寺大本願別院十念寺世話人

神社仏閣と児童
―直江津への合併は―

川合　春日山のことは高田の座談会で言い尽くされているし、また国府館跡、府中八幡宮は直江津の領域であるから、これを省くこととしましょう。久保田先生、史跡と児童教育の関係について何かお話がありませんか。

久保田　私は着任早々で、シツカリした考えもまとめていませんが、やはり子供の教育環境が良いということが第一条件で、新しく学校を建てるとすれば、まず第一に環境に注意を払います。その点は大いに恵まれている次第で、名所旧跡は今の話のようにたくさんありますし、一歩出れば日本海の風光明媚なのが子供心にいい影響を与えるわけです。それで、私はぜひとも最も良い環境を利用して、子供の教育をやりたい理想を抱き、その方法も研究しております。

川合　折々、居多神社、愛宕神社などの境内を掃除している小学生を見かけますが、あれはとてもいいことです。学校で言いつけるのですか、また寺の方はどうなっていますか。

久保田　毎月一回、生徒の方で自発的に神社の境内を掃除する習慣がついているのです。それを仏閣まで広げるかどうかは研究中で、私としてはいいことだと思います。

渡邊　朝やるのですか。

久保田　登校前にやっているようです。清掃を済ませてキチンと始業時間までに学校へきております。

堀前　起き抜けにやるのですな。

渡邊（喜）　起き抜けに竹箒を担いで、どしどし掃除してから登校していたのです。それも今までは、掃除が済めばバラバラになって小学校へ行ったのが、このごろでは六年生の大きいのが皆を集め並んでいくのです。見ていても、ちょっと気持ちのいいものです。この並んでいくのは、大体、字分けになっているらしいです。

岩片　部落部落で行くようです。

久保田　見ていますと、まあ氏子氏子が固まっているらしいですよ…。

岩片　五智と直江津の合併問題はどうなりますでしょう。

川合　直江津ではもろ手を挙げて歓迎しています。旧春日が同意するかどうかの問題です。

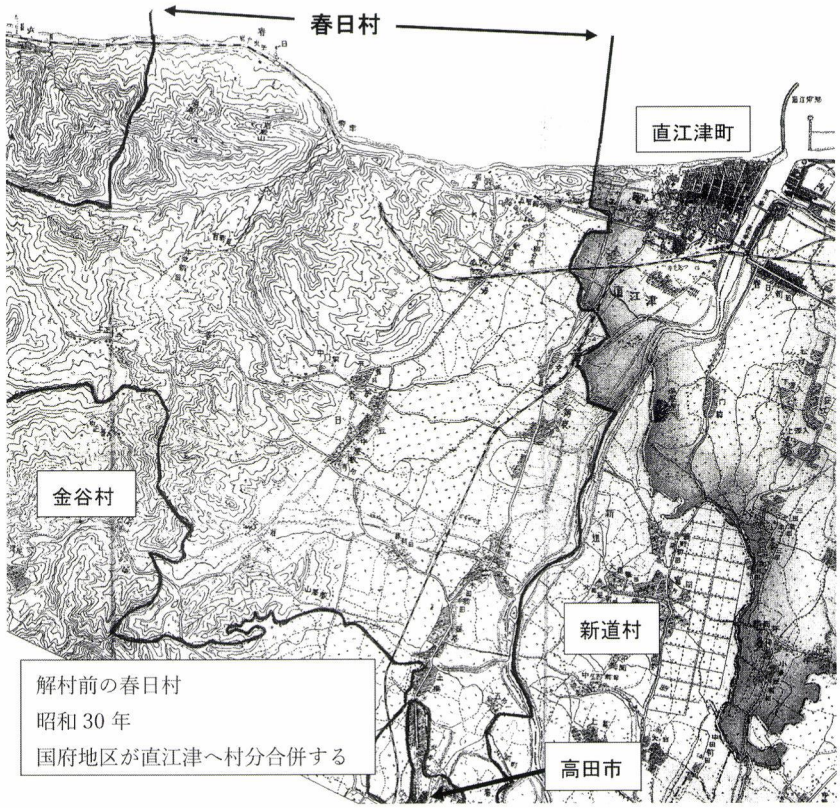
　旧国府は言うまでもなく賛成でしょう。旧高志の高田最寄りはむしろ高田市に合併するのが順当だと思います。春日村を二分して高田と直江津へと合併するか、あるいはまた金谷村の一部を高田に合併し、その残った一部と春日村の山手の部分、すなわち主として旧春日方面とを合併し、別に新たに一村を作るか、円満な解決は一に地元の諸君の心がけ次第のことと思いますが、いざとなるとななかなむずかしく、こんがらかりましょう。

堀前　促成するにはどうしたら一番いいですかね。

川合　高田、直江津の人々が騒いだのではいけませぬ。春日村の諸君が進んで運動を起こすべきです。自発的にです。（春日村＝国府村・春日村・高志村）

堀前　旧国府の方では熱心に希望しているのですが、やり通すとすると、喧嘩みたいになっしまいます。といって黙っていては永久に実現しませんしね。

川合　現在の春日村を二分し高田と直江津とに合併し、さらに将来、高田市、直江津町を一丸とした大きな市街地を造ったら最も理想にかなうでしょう。二〇年ばかり前、私は「国府再興論」というのを地方新聞に発表した



解村前の春日村
昭和30年
国府地区が直江津へ村分合併する

ことがあります、すなわち、今言いました一市一町一村を合併し、越府と名付け、昔の国府へ引き返そうというのでした。国府、春日山を包含した昔の国府は北陸全道の支配権を握っていたのですから。

荊木　国府の全盛時代はいつ頃でしたでしょう。

川合　戸数八千、人口五万を有すると言われていました。その時代としてみれば、日本の大都会だったのです。上杉時代と思っています。上杉時代が全盛の極点であったろうと思います。

斎藤　私も上杉時代と思っています。

岩片　話はもとに返りますが、五智を発展させるために保勝会から助力を頼んだら、直江津の人たちは援助してくださるでしょうか。

川合　直江津は援助を惜しみますまい。今でも「直江津町五智」と書かれていますからね。

斎藤　直江津への合併運動を促進するとの決議を発表したらどうです。

岩片　五智商工会では案を練っています。

山口　一日も早く実現せしめたいと思っております。

荊木　五智商工会や保勝会が決議をしても、村会の決議が出来なければ駄目でしょう。円満な解決が難しいので困ります。旧国府一部の組み入れはどんな手続きになりますか。

川合　境界変更ということになります。反対があっても断行すれば、されぬことはありませぬ。この問題は宿題は宿題として次の問題に移りましょう。

両眼の空いた話
―弘法さんの井戸―

川合　この地方の伝説で、善光寺浜に伝わった釈迦如来海中出現の話と善導寺浜に伝わった青柳の竜女の化(解)脱の話は知らぬ者もないが、このほかでは代表的なものに琵琶法師の話があります。

　昔、奥州に一人の盲人がありました。官を貰うために冥加金を持って上洛の途に上がったのです。途中、国分寺に参篭し琵琶を弾じ祈願をこめていますと、いつの間にか路銀を入れた財布が無くなってしまったのです。それは付近にいた風来の坊さんに奪われたのです。盲人はこうした災難に遭うのも何かの因縁であろう、あるいは上洛を見合わせて国へ帰れと仏が教えてくださったので

はないかと殊勝にも思い諦めて、トボトボと来た道を引き返し、関川に架けられた往下の橋まで行くと、どうしたはずみか目が明いたのです。盲人は天を仰ぎ地に伏して大喜びに喜び、まさしくこれは五智如来の御利益に違いないと、再び国分寺へ詣り、仏前に感激の礼拝をいたし、ふとかたわらを見ると、両眼のつぶれた坊さんがいる。それは路銀を盗んだいたずら者だったのです。現前に因果応報の恐ろしさを見た件の盲人、いや幸福な旅人は、思い出の琵琶を国分寺に奉納して辞し去ったという筋なのです。

その琵琶は長い間お堂の梁の上には挿んであったそうです。この伝説はよほど古いものらしく、約四百五十年前、長享二年（一四八八）に僧万里（集九）という人が上方から来て国府に滞在し、その紀行である「梅花無尽蔵」という書物の中に、

堂宇如山冠海崖　如来盛五宝蓮華
白盲聞昔得明眼　梁上至今留琵琶

という詩を載せています。室町初期の伝説なのでしょう。


開眼した琵琶法師が奉納したと伝えられる琵琶
消失前の国分寺本堂に飾られていた

堀前　高田にも往下の橋というのがありますね。

川合　左様です。往下の橋というのは昔の関川（今の荒川）が現在より西の方、すなわち今の延寿寺の裏を流れていた時代の橋です。つまり国府の東口、奥州街道に架かっていたのです。

ただ今、高田にありますのは高田開府の際に国府の橋の名を持って行ったのです。橋の名ばかりではありませぬ、国府の地名の大部分も高田に移したのです。

岩片　岩戸山（岩殿山）の大日如来に関する伝説で（以外で）、他県の人を惹きつけるのがありませんでしょうか。

川合　岩戸山が諏訪大神の誕生の地であるという伝説そのものが長野県下で大受けです。上諏訪で信越銀行大会があった時にこの話をしましたら、信州の銀行家諸君が初めて聞いたと言うて大変感激していました。

岩片　姥岳（乳母嶽）神社の話もありますが。

川合　槌王（厨子王）、安寿姫の伝説しょう。あれを姥岳神社に結び付けたのは後世のことです。

久保田　弘法大師の鏡ヶ池の話は。

川合　鏡ヶ池は親鸞聖人の遺跡です。弘法大師に関係がありません。付近に弘法の井戸というものが二つも三つもありますが、弘法大師が越後へ来たという伝説は信じられません。

斎藤　私も来ないのではないかと思います。

川合　弘法大師は百世に傑出した名僧でしたから、日本いたるところに大師に仮託した遺跡というものがありますが、多くは好事家の付会です。いわゆる弘法の井戸も親鸞逆さ竹、弁慶力餅（米山峠の茶屋の名物）、最明寺釜蓋、松山鏡の大伴家持、坂上田村麿などなど同工異曲なのです。

秘められある鍵
―五智の代表名物―

斎藤　この間、佐渡へ行ってきましたが、佐渡の人で熱心に五智と郷津を研究していた人がありました。その人が言うには、郷津はもと国府津と言われ、佐渡の小木港と関係あった、何か参考となる古いものがあると思うと言っていました。

川合　郷津〈ごうづ〉は国府津〈こうづ〉の転訛であるというのが定説となっているようです。小木港は郷津―直江津の対岸ですから、むろん深い関係があったと思います。

伝説の話でちょっと思い出しましたが、保坂家（戸野目の保坂家）の別邸（KDD海底ケーブル基地周辺）と清風軒との間に「富士塚（藤塚）」というのがあります。昔の貴族の墓に間違いないと思うのですが、お藤という娘を埋めたなどという伝説が遺されています。富士塚という名から思いついた例の贋作でしょう。あの古墳を専門の斎藤さんから調査していただいたら面白いと思いますが。

斎藤　あれは立派な古墳です。

川合　あの古墳の中に、この地一帯の歴史の鍵が納められていると思いますが。

斎藤　そうですね。遅くも奈良朝時代のものでしょう。

岩片　ここに昔「おふじ」という娘がいて、佐渡の若者を恋していた。若者は毎日おふじが灯す灯を目当てに荒海を泳いで逢いに来たのですが、ある時、いつの間にかその灯が消えていたため、若者は目当てが無くなって溺れ死んでしまった。おふじは、その若者を弔うためにふじ塚を建てたという伝説があるのですが。

川合　それに類似した伝説が刈羽にも三島にもあります。何人（なんぴと）かが創作した海岸に共通の哀話なのです。

渡邊記者　この海岸の発展のため、青年会では何かおやりですか。

渡邊（喜）　臨海教育が盛んになりまして、今年は附属小学校を始め十ヶ校くらいの生徒が参りましたが、水が澄み、環境が俗悪でないと言うので、一般海水浴客のためにもと思いまして、今年から浜小屋を設けましたが、来年からはもっとこれを増すつもりでおります。

川合　最後に五智名物に関し、皆さんのお話を承りたいと思います。

荊木　五智保勝会の創立は、今年の正月、川合、斎藤両先生に史跡の講話を伺いましたのが動機となったのでありますが、その組織を了とするまでの瀧川美堂君の斡旋奔走はまことに涙ぐましいものがありました。美堂さんは、かつて高田市の委嘱を受け、陛下へ献上の謙信公騎



文中では「富士塚」と言われているが、考古学上は「北塚」
昭和25年に発掘され、鏡・鉦・硯・刀子・銭が出土した
現在は宅地化され、海よりの一段下にKDDの海底ケーブル基地が建設されている



林泉寺に奉納される謙信公像を前に立たずむ瀧川美堂
昭和４年刊「新潟県肖像録」より

馬像を刻み、また米沢市の依頼で稽照殿へ安置の鷹山公衣冠像を刻まれたことがありますが、同君の木彫り人形、木目込み人形は五智の名物として誇り得べきものであります。

斎藤　和倉楼並びに清風軒の包丁は世に定評がありますが、山口屋の「そば」もまた特殊の風味を有する点から五智の名物の一つとして推奨され得ると思います。

岩片　五智松茸の風味も格別です。

渡邊記者　いろいろありがとうございました。

閉会いたします。

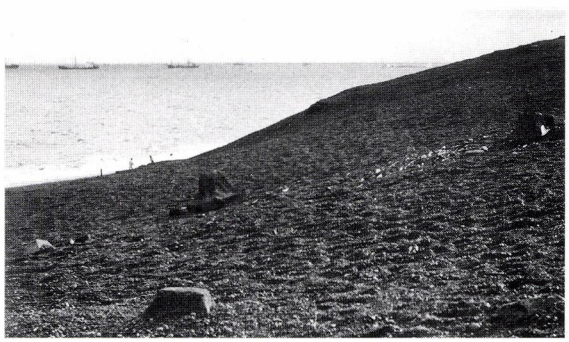
歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの　伝えておくべきもの

古老の言葉を聞きなおす

座談会の中で川合直次氏が発した「善導寺浜」は、現代のわれわれには聞きなれない地名であるが、出席者から何らの疑問も質問もなく、当時の人たちにとって普通に認識されていたようである。真行寺の中戸賢亮師が郷土史家中澤肇氏に「子供のときは善導寺浜に泳ぎに行ったもんですわ」と思い出を語ってくれた逸話（頸城文化五〇号「直江津砂丘にあった古寺」）によって、昭和三〇年代まで「どこ」であるか、地域の人に認知されていたことが分かる。

善導寺は福島築城で城下に移転し、高田開府に際して寺町の現在地に再び移転したと言われているが、もともとの所在地である「善導寺」と「善導寺浜」について、明確な位置が確定されていない。『訂正越後頸城郡誌稿』



上越市立水族館「うみがたり」の北側の砂丘一帯の斜面に五輪塔や人骨が見えた
写真の四角い物は五輪塔の地輪、その奥の傘のようなものは火輪
写真中央右の白いものが風化した人骨

り、これらを合わせて善導寺跡であろうとしている。

旧水族館は西本町に位置し、新水族館「うみがたり」は五智一丁目であり、そこは祇園祭の神輿渡御の限界でもある。

また、その西方の元上越自動車学校の造成中に縄文時代の遺跡が発見されているが、遺跡上部から中世の五輪塔などの石塔が大量に出土（十念寺境内に移して祀られている）していることに着目し、中澤氏はこれら出土遺物と「郡誌稿」の「善導寺の西側に称念寺があったという記述や、先の「古地図」に記載されている「称念寺の黒松が渡船の目当てになっている」などから、高田寺町の称念寺の故地であろうとしている。なお、この辺りは関川河口から続く砂丘のピークでもある。

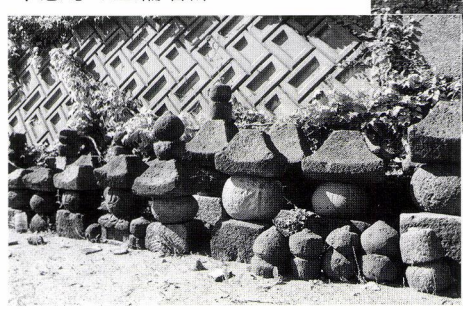
この先の老健施設和久楽（料理旅館和倉楼跡）やＫＤＤ海底ケーブルの施設地周辺からも、造成にあたって宝塔や五輪塔が出土し、国分寺本堂西側や光源寺の元和倉楼主岩片家の墓所に祀られている。

なお、「善光寺浜に伝わった釈迦如来海中出現」とは居多の浜に上がった釈迦涅槃像のことであり、長野善光寺門前の釈迦堂に祀られている国重要文化財の「釈迦涅槃像」である。寺町善導寺の善導大師立像も「善導寺浜」の難船から出現したものと伝えられている。この善導寺に伝わる竜神井戸伝説の元と思われるのが「青柳の竜女の解脱」伝説であろう。「知らぬ者はない」と、川合氏は語っているが、善導寺（浜）に伝わった具体的な物語はどのようなものであったのだろうか。

これらの出土品、伝承や物語は、直江津駅南に存在した室町守護所と中世越後府中が展開する「直江の津」の空間構成を読み取る貴重な史料として、私たちに語りかけている。



光源寺の岩片家の墓所に祀られた五輪塔



十念寺の五輪塔群

付図の「春日山古城近方図」では、府中八幡社の北側に位置している。中澤氏は先の論考で、土地の古老が所持する「古地図」などと比較して、現直江津中等学校の北側、上越市立水族博物館跡地であろうとしている。

ここはもともと直江津高等学校のテニスコートで、造成にあたって大量の人骨が現れ、僧侶でもあった校長久保田氏が丁重に供養したと伝えられている。昭和五四年になって、テニスコートに水族館を建設することになり、造成中に大量の陶磁器片が採取されている。採取された遺物については、平丸誠氏が「善光寺浜周辺出土請来陶磁器のこと」（頸城文化四四号）で詳しく報告しているが、中澤氏は、先の「古地図」を見ると、この辺りの地籍は塩屋新田で善光寺浜との境界線が引かれてお

国府――春日山――府中――直江津の空間を駆ける

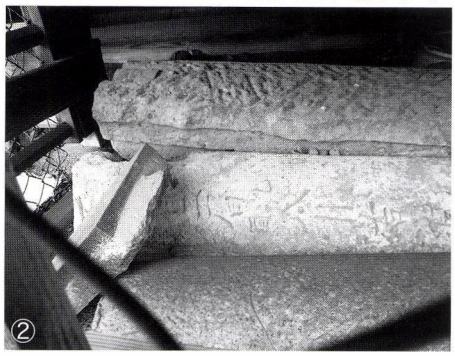
春日山城と越後府中 6

笏谷石に越後府中と直江津今町を見る

小島幸雄



①


②


③

はじめに

前号では、バラストとして利用された焼き物や石が、商品としても流通したであろうことを述べた。なかでも福井市で産出した笏谷石に焦点を当て、上越市内にあるいくつかを紹介した。その後も笏台石への執着は収まらず、佐藤氏（北越出版）まで巻き込んで街歩きの素材として鵜の目鷹の目で路傍の石や墓地の草生した石塔を探している。夕刻に泉蔵院さんの境内を訪れた際には、営巣中のカラスに要らぬ警戒感をもたれて、頭の上を飛び回って威嚇される始末だった。こんな怖い場面は嫌だが、街中に見られる歴史の遺産を探す試みはとても楽しいもので、性懲りもなくまたまた街歩きに出かけるのである。

本誌に仲町にあった看板（写真①）を紹介したことがある。福島城下から魚の専売権を有して高田城に移って魚屋を営み、仕出し屋へと変貌し、最終的に料理屋へと成長を遂げた仲町の歴史がきわめて簡潔に示されていた。そんな町の歴史を示すものが、まだまだ街にあふれているのだと思っている。

笏谷石を見に

どうしても本場の笏谷石を見たくなって福井に走った。何年かぶりで訪れる福井には、もう一つの目的があった。鯖寿司が食べたかったのだ。それも駅弁で食べたものだ。しかし、夕方六時過ぎで遅かったためか、お目当ての駅弁には会えなかった。残念。

なぜ福井かというと、府中八幡宮で出会った鳥居の印象が強烈だったからである。小さな鳥居であるが用をなさなくなったのであろう、今は床下にきちんとおかれていて大切に扱われていたことを示している。けっして粗末に扱われてはいない。この鳥居の大きさが、二〇年以上も前に見た佐渡の小比叡神社の鳥居と同じ規模だったことが筆者を惹きつけた。佐渡のものは御影石だったと

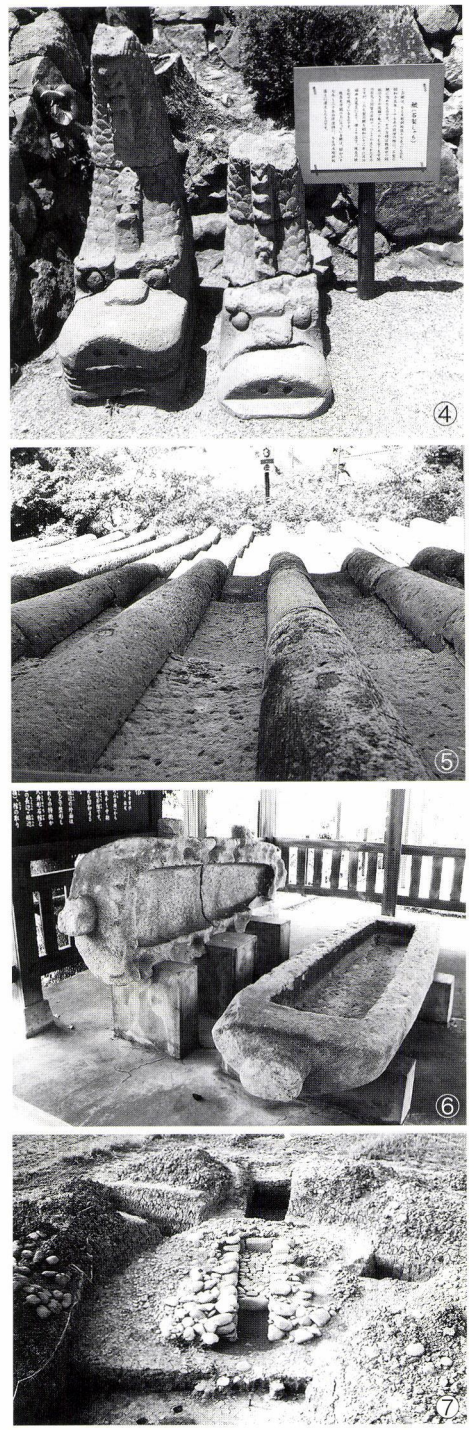
記憶しているが、府中八幡社の鳥居と思われるそれは美麗な笏谷石（写真②）で作られていたのである。笏谷石と御影石、この組み合わされた状況を笏谷石の本場の福井で見たかったのである。ちなみに隠れていて干支が見えただけだった年号は、佐藤氏が調べて正保二年（一六四五）だということが分かった。小比叡神社の鳥居は大久保長安が寄進したことが記されていて、いずれも江戸前期であることがわかる。それはあとで触れる。

丸岡城からスタート

まず丸岡城からスタートした。筆者の丸岡城の記憶にはたくさんの笏谷石が思い浮かぶが、現地ではなかなか笏谷石と再会しない。そうだ、石垣が笏谷石ではなかったのだ（写真③）。福井地震で落ちた丸岡城の鯱瓦（写真④）が笏谷石で、今でも天守閣の入り口に展示されている記憶が鮮明だったため、石垣の記憶がかき消されていた。石垣は笏谷石ではなかったのである。ちなみに、笏谷石製の鯱瓦は創建当時のものではなく、戦前の修理で銅板葺のものが作れず笏谷石で作ったということである。

丸岡城で最も有名な笏谷石は屋根瓦（写真⑤）である。一〇〇トンを超えるといわれる笏谷石製の瓦は、重さで建物を風からは守れるが、地震の時には逆効果だったかもしれない。地震では天守が完全に倒壊した。熊本地震の時に天守の屋根瓦が一斉に流れ落ちたシーンを記憶されている読者もおられると思うが、丸岡城の場合には瓦が浮く前に建物を振る要素に作用したのではなかろうか。

さて、今回の笏谷石紀行は直江津の空間を裏付ける景観を見たかったからである。それらを紹介しながら、直江津に置き換える景色を実体験していくことにする。


手前が石室の入口

真っ先に出迎えてくれた石棺

丸岡城の天守に向かう階段を登ってまず出迎えてくれるのが、石棺である（写真⑥）。古墳時代の中期というから、今から一六〇〇年くらい前に作られたものである。石棺は死者を寝かせたもので、中の刳り抜かれた長さが一・七二メートルというから、現代人として大柄ではない。当時の福井地方の権力者のものであろう。

この石棺が造られた時代の石室は竪穴式で、細長い石積みの石室を造るが天井が空いたままにしておく。その後写真のような石棺や木棺を納めて天井に石を並べて塞

ぎ、土を盛り上げて完成させるのである。

ところで、上越地方にある古墳は横穴式石室という構造（写真⑦）で、石を積み上げて死者を埋葬する空間を作り、上には大きな石をのせて土を盛って完成させ、横から出入りできるようにしたものである。死者は木製の棺に入れられて石室におさめられ、入り口が塞がれる。古墳時代後期に流行した石室の構造である。上越地方の古墳では、川原石を使って石室が造られている。

丸岡城天守閣に

天守閣に乗っていた笏谷石の鯱瓦は、前述のように創建時のものではないが、城のシンボルであったことには間違いない。しかし、ここに来て筆者の記憶違いが明らかになる。丸岡城の石垣は笏谷石ではなかったのだ。唖然とした。鯱瓦（写真④）と瓦（写真⑤）が頭に焼き付いていて疑うことが無かったのだ。加えて階段も笏谷石で作られていたから、石垣も笏谷石だと思い込んでいたのだろう。

丸岡城の笏谷石は石瓦・階段・石碑・石柱・石仏と多種多様であるが、唯一使用されていないのは石垣であった。先入観とは恐ろしいもので、今回の笏谷石紀行は、筆者にとってとても大切な視点を与えてくれることになった。中世と近世（江戸時代）では、笏谷石の使われ方が大きく変わっていったのではないかということである。

丸岡城の天守閣に登ったことがある読者は、あの急な階段を思い出しているであろう。今回は分度器を持参しなかったので正確な角度は測れなかったが、調べると六二度という数字が躍っていた。実感としては八〇度以上、直角ではないかと思えるくらいの急な階段である。

丸岡城から次なる目的地の足羽山をめざして、散歩状態で駐車場に向かった筆者の目に、黒く塗られた板と上部に漆喰を施した塀が目に飛び込んできた。正確にいえば塀の基礎石（写真⑧）である。切り揃えられた青みを帯びた笏谷石の美しさは格別で、なかなかの風情があった。家の門構えの隅に「東三ノ丸」とあった。

足羽山に登る

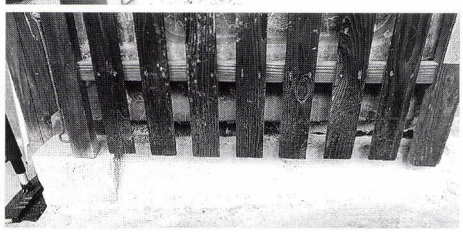
今回の真の目的地である足羽山に登った。笏谷石の原産地で本物を見たかったことと、笏谷石で作られた継体天皇のお姿をつぶさに拝見することであった。

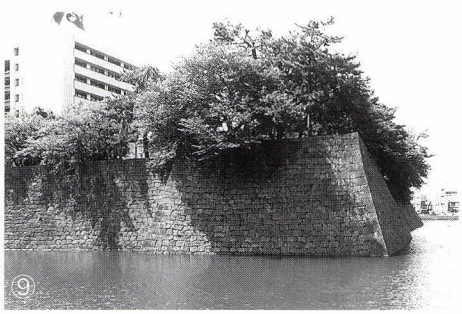
車を走らせていると県庁の標識が見えて内堀が見えた。福井県庁は福井城跡の本丸にあることは知っていたので、県庁よりも福井城の石垣を見てみたかった。石垣がまさに笏谷石で、見るからに笏谷石然として凛と積まれている。内堀を挟んで車窓から眺めただけでもそれとわかる、教科書のような笏谷石の集合体であった（写真⑨）。

比較したかったのは、丸岡城と福井城の石垣である。築城年は丸岡城の天正四年（一五七六）に対し、福井城は慶長六年（一六〇一）というから、四半世紀の年代差がある。そして、なんといっても古い丸岡城が笏谷石以



⑧


蔵の戸前に施された笏谷石（直江津にて）


⑨

外で積まれているのに対し、福井城の石垣は笏谷石を使用していることである。

丸岡城は笏谷石の産出する足羽山から直線距離で約一〇キロメートル、その間に足羽川と九頭竜川があり陸上で運ぶことは困難だったのであろう。また船運では足羽川を一度下ってから九頭竜川を遡ることになる。重量のある笏谷石を大量に積んで大河を遡上することは難しかったとも推測される。それに対して福井城は足羽山と至近距離にあり、川を挟んでいるとはいえ距離の短さは非常に有利であっただろうし、石材の産出技術の進歩があったことも考慮しなければならないであろう。技術革新は、必要性が生みの親であることの証しと言えよう。

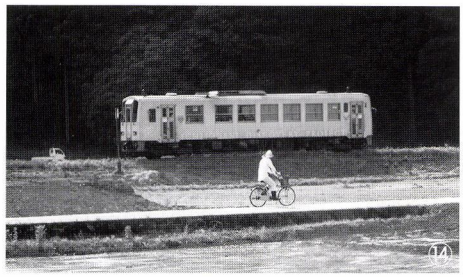
継体天皇像と足羽山招魂社

足羽山に登った理由のもう一つが継体天皇の像である。実はここでもカラスに威嚇されたのだ。やっと見つけた石像に至る階段は御影石で積まれていて、筆者の気持ちを萎えさせるには十分であった。しかし、途中の踊り場に至って気持ちが一変した。踊り場以下は御影石、石像までの階段は笏谷石、そして周りのベンチなどは全て笏谷石だったのだ（写真⑩）。

笏谷石と御影石の融合こそ、近世（江戸）後期から近代の黎明期の北陸の石文化といえるのではないだろうかと考えていた筆者には、最高のプレゼントだった。足羽山公園は、ベンチからテーブルとあらゆるところに笏谷石が使われていたのが印象的だった。

継体天皇像から戻ろうとして何故か惹きつけるものがあり違う道をたどると、そこで目にしたのは写真⑪。足羽山招魂社である。前景で白く伸びる石敷きが御影石、建物の土台石が笏谷石である。まさに直江津で見慣れた景観そのものが笏谷石の故郷で見られたのである。写真⑫と⑬は八坂神社の拝殿と参道である。使用されている石材が全く同じであることに気付かされる。笏谷石と御影石の融合こそ、日本海交通の近代化を示しているのではなかろうか。先の泉蔵院でカラスに威嚇されながら見た御影石の巨大な墓標は、まさに日本海に大型船の登場を意味しているのではないかと思うのである。


⑩
⑪
⑫
⑬

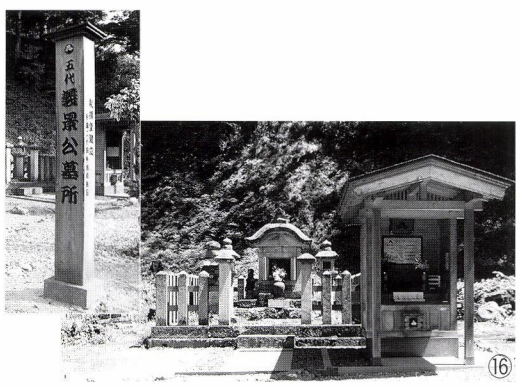




⑭



⑮



⑯

一乗谷朝倉氏遺跡へ

紀行の最後は思い出深い一乗谷浅倉氏遺跡である。上越市に移って文化財行政を始めた筆者は、当時の清水貞彦教育長から「あなたの仕事は春日山城跡の保存と活用です。しっかり勉強してください」と言われたことがある。既に幽明境を異にされたが、今でもその時の情景を思い出す。中世遺跡は門外漢だったので、学生時代からの知人、朝倉氏遺跡調査研究所の小野正敏さんを頼って勉強させていただいた。出土品も多くなり、持ち運ぶより招請した方がより多くを見ていただけると思い、約四〇年前のことであるが、請うて春日山城跡の出土品を見てもらった。来越した小野さんの出張命令書は、「越美北線一乗谷駅から信越本線春日山駅」というものであった（越美北線は現在九頭竜線の愛称で呼ばれている写真⑭）。朝倉氏義景が上杉謙信を訪ねて春日山へ登城するために来たようなものだと、二人で大笑いしたことを思い出す。

笏谷石と御影石の融合を絵に描いたような景色が見られる場所が、一乗谷朝倉氏遺跡の下木戸跡入り口に建つ特別史跡の標柱と説明板である（写真⑮）。御影石の標柱の横に笏谷石の枠で説明板がはめ込まれている。昭和四〇年代に耕地整理で朝倉氏遺跡が地中からその姿を現したのであるから、碑が建てられたのはそれより後のことである。史跡には必ずと言ってよいほど石製の史跡の名称板や標柱を見ることができる。春日山城跡もしかり、高田城跡にもたくさん存在する。

ところが、一乗谷でも御影石の無い空間を体感することができる。写真⑯は朝倉義景の墓所である。五代義景公墓所と記された木柱が建ち、宝篋印塔の墓標の入った石廟を囲んでさまざまな形の墓石や石仏が並ぶ。墓は天正元年、織田信長に焼き払われて直ぐに建てられたものではなく、死後約一〇〇年後の寛文三年（一六六三）に供養のために建てられたものである。ここで注目したいのは、一七世紀後半に入っているのに御影石が全くないことである。今も建つものから周囲に集積されたものまで、ことごとく笏谷石であることがとても新鮮であった。

このような戦国から江戸時代前期の空間は上越にもある。林泉寺の墓所がそれで、天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉の小田原攻めの陣中でなくなった堀秀政の墓が笏谷石で出来ているほか、元和九年（一六二三）建立の川中島戦没者供養塔、寛永年間（一六二四～一六四二）の紀年銘が記された宝篋印塔などがある。

笏谷石と御影石～越後府中から今町へ～

ここまで書き進めてきて、「笏谷石の空間」から「笏谷石と御影石の空間」へと移行し、ある時期から「御影石の空間」へと変わっていったのだと思えるようになった。



堀秀政墓所


寛永年間の紀年銘がある
宝篋印塔


川中島戦没者供養塔

そして、ふと思い出した事柄がある。本誌でも書いたが、珠洲焼が衰退して越前焼にとって代わる背景である。珠洲焼は自己が内在した要因、つまり製品の粗悪化が衰退の原因とする考え方があった。しかし、筆者は航海術の進歩、船舶製造技術の進歩も含めて、外的要因に衰退の原因を求めてきた。能登半島の北東端で焼かれていた珠洲焼は、湊に次々と寄港しながら北上する船に珠洲湊で船積みされ、バラストと商品をかねて北に運ばれた。しかし航海術が進歩し、船が大型化して能登半島の先に位置する珠洲に寄港する必要が無くなった船は、三国湊で越前焼を積み込むことで、珠洲焼は衰退の一途をたどることになったのではないだろうか。製品が粗悪化したのではなく、商品価値（需要）が下がった珠洲焼の工人たちが生産意欲をそがれて粗悪化したと考えたい。

笏谷石と御影石の関係はどうかと考えた場合、汽船の航行が要因と思えるのである。江戸時代の後期には、ある程度の御影石は入っているようだが、爆発的に増えるのは明治になってからと思える。焼き物とは違って粗悪化するわけではないので、御影石に替わっていく根本的な要因は外部に求めなければならない。とすれば、大量の御影石を運ぶことができる汽船の就航が、笏谷石の世界に影響を与えたと考えても不思議はない。

今回の笏谷石紀行は、筆者に新たな視点を与えてくれた。その結果、石造物から見た場合、越後府中の痕跡は国分寺と林泉寺に一部みられるが、他の多くは笏谷石であっても江戸時代、今町湊に関するもので、その後、御影石が持ち込まれて大きく変貌することが理解できた。

今後も中世から近世へ、そして明治の近代へと移り変わる街の姿を少しでも明らかにしていきたいと思っている。一日の紀行であったが、とても楽しかったことを記してまとめとする。

（上越市専門学芸員）


足羽山から三国湊を望む

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

平成三〇年六月二六日、新水族館「うみがたり」オープン。夏休み・お盆などの帰省客で、当地も賑やかになると期待大である。

他県での観光で思いだすのは、風景とともに旅先で出会った方からの笑顔であり親切である。

「浜の人は、口は荒いが気は良い」と言われる。方言まるだしでも、遠方からおいでの方に、ちょっと声を掛けてやれば喜んでもらえるだろうし、それも大切な地域活性化につながることだと思う。

「おまんたー　どっからきなったねー。気いつけないやねー」と。

（梅田）

目　次

特集　ロングインタビュー
トキ鉄開業3年を考える　4
『おらが在所』　18
国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中　6
笏谷石に越後府中と今町を見る
上越市専門学芸員　小島幸雄　25
巻頭エッセイ
私のまち、直江津祇園祭　冨塚　稔　2
歴史は「今日」への手紙
古老の言葉を聞きなおす　23

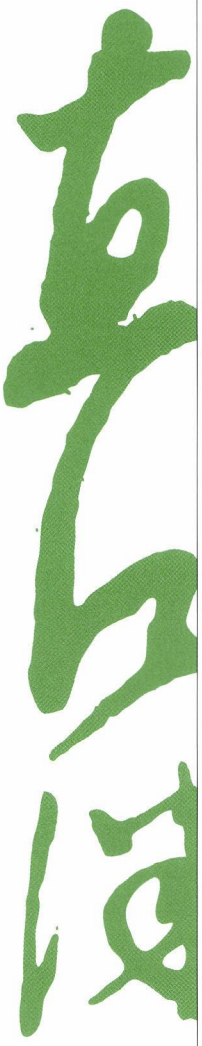
「直江の津」
第一五巻一号　通巻四二号
発行日／平成三〇年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫総合企画室
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2018・1号

直江の津



発行／平成三十年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円